全博協研究紀要　第24号
2022年３月31日
全国大学博物館学講座協議会

関西大学博物館における
コロナ禍での博物館実習の取り組み

山下　大輔

関西大学博物館における
コロナ禍での博物館実習の取り組み

山下　大輔*

はじめに

新型コロナウイルスの流行は、日常生活のあらゆる面に大きな影響を及ぼし、今まで当たり前にできていたことができなくなるという、私たちがこれまで経験したことのないまさに非常事態の状況が続くこととなった。

本学で学芸員を養成する博物館学課程の総括ともいえる「博物館実習」の授業でも、この非常事態の中で実施せざるを得ず、結果、これまでの博物館実習とは大きく異なる内容となった。本稿では、このようなコロナ禍の中で本学の博物館実習における具体的な実践例を報告することで、各大学が置かれた状況がそれぞれ異なる中での博物館実習の運営に関して、現状とその課題を共有することを目的とする。

１．関西大学の博物館学過程の概要

本学の博物館学課程は、1961（昭和36）年４月に末永雅雄・横田健一・小野勝年・有坂隆道の４名を担当者に、受講生16名で開講され、2021年４月には創設60周年の節目を迎えた。本課程における学芸員資格取得に必要な科目は、主として文学部に配当されているが、他学部の学生でも履修・修得することが可能である。そのため、履修者は文学部の学生が大部分を占めるものの、法学部・経済学部・社会学部・政策創造学部などそれ以外の学部に属する学生もみられる。また、大学院生や科目等履修生も本課程の必要科目を履修し単位を修得することで、学芸員資格を取得することができる。博物館実習は、博物館概論・博物館資料論・博物館教育論の３科目を履修した後の３年次以降に履修が可能となる。

博物館学課程の運営と不即不離の関係にある関西大学博物館は、1954（昭和29）年に末永雅雄先生が旧図書館千里山本館（関西大学千里山キャンパスにある現簡文館）の３階にあった考古学研究室に設けた考古学資料室を原点とする。その後、1974（昭和49）年に旧大学院棟（現岩崎記念館）４階に文学部考古学等資料室が新設され、1985（昭和60）年にはこの考古学等資料室が関西大学創立100周年記念事業の折に総合図書館が竣工・開館したことを契機に、簡文館と命名された旧図書館に移転することとなった。1994（平成６）年には博物館法に基づく博物館相当施設となり、関西大学博物館が開館することとなった。以来、博物館実習を中心に博物館学課程の各科目の授業において利用されている。

＊関西大学博物館　学芸員

２．関西大学における従来の博物館実習

本学の博物館学課程については、歴代の担当教職員の尽力により、開講以来、カリキュラムの充実と深化が図られてきたが、1961（昭和36）年の博物館学課程の創設当初より、充実した専門科目の開講とともに特に博物館実習に重点が置かれている。講座の創設以来、博物館実習は通年科目として、基本的に学内の施設・資料を用いて実施してきたことも大きな特徴といえる。さらに、博物館実習を担当する教員は本学の専任教員のみならず、現役の博物館・美術館学芸員や刀匠・表具師・宗匠など各専門分野において一線で活躍する錚々たる面々を講師陣に迎えて開講していることも特筆すべき特徴といえよう。2021年度現在で、担当教員は専任、非常勤を合わせて22名を数える。

このように、本学の博物館実習は、館務実習についても学外の館園に学生を受け入れてもらうのではなく、全ての学生が関西大学博物館において受講することとなっている。開設当初は歴史系の受講生を主体とした混成クラス（定員30名）で運営されてきたが、1979（昭和54）年に受講希望者の超過状況を考慮し、「歴史コース」と「美術コース」の２コース制（定員60名）となった。さらに、1991（平成３）年にはこれら２コースに加え、「文書コース」が設置され、３コースでの運営となった。その後、関西大学博物館が開館した1994（平成６）年には第２部にも開講され、第１部60名、第２部30名の合計90名に定員が増員された。受講希望者の増加に伴い、コースの増設や定員の増加などにより対応してきたが、毎年のようにクラス定員を超える受講希望者があった。そのため、昼夜開講制（デイタイムコース・フレックスコース）の導入を契機に、2003（平成15）年には定員を120名に増加するなど抜本的な解決が図られることとなった。

この昼夜開講制の導入に伴い、それまでの「歴史コース」「美術コース」「文書コース」という３コース制を再編し、「金曜日クラス」「土曜日クラス」の全受講生が基本的に同一のカリキュラムを受講することとなった。金曜日クラスは原則的に受講生の大多数を占める文学部３年次生、土曜日クラスは文学部以外の３年次生や４年次生、大学院生、科目等履修生が受講することとなり、現在までこの体制で実施している。受講者数は近年では減少傾向にあり、ここ数年は20～50名前後で推移している。先に述べたように本学の博物館実習は通年授業で、金曜日クラス・土曜日クラスそれぞれ４・５限の週２コマ（１コマ90分）を開講している。

本学の博物館実習のもう一つの大きな特徴は、例年11月に開催する博物館実習展にある。博物館実習の集大成ともいえる展示会で、企画・立案から資料の借用交渉、実際の資料借用・返却、広報用のポスター・チラシの作成、資料展示および撤収までを一貫して実習生が主体的に行っている。現在は11月の１週間を「博物館実習展」として広く一般公開しており、毎年この展示会を楽しみにしてくれている固定ファンも多い。

さらに、博物館実習での毎週の講義および実務実習において、実習生へ年度当初に配付している「実習簿」に記録していくことを義務づけている。この実習簿には各講師により配付されるレジュメや自身で作成した講義ノートをはじめ、博物館実習展の際に作成した借用依頼等の書類や館外見学実習に赴いた際に入手した館園のチラシやパンフレットも綴じ込むように指導している。年度の最後にはこの実習簿も採点の対象となり、歴代の博物館実習履修者には卒業後も大切にこの実習簿を保管している者が多い。

３．コロナ禍の中での博物館実習（2020年度）

関西大学では、新型コロナウイルス流行によって、2020年度授業当初２週間が休講となり、以降の授業はオンラインを活用した授業として実施することとなった。そのような中、博物館実習の授業については、実技実務実習が主体であるという制約から、リアルタイム配信は行わず、オンデマンド配信に対応した関西大学の遠隔授業配信システム「関大LMS」を用いて、担当教員の授業動画、教材や資料の配信配付、課題の提示を行った。その内容は博物館実習授業のシラバスに従い、休講した２回の振替も含めて15週の授業のオンデマンド配信を行なった。美術・工芸資料、考古資料、民俗資料、歴史・文書資料といったそれぞれの分野の資料について「基礎的な取扱い」から「資料の梱包」、「資料の調書の取り方」へと段階的に実習し、博物館における学芸業務について基礎的な知識・技術の習得ができるようにした。

また、オンラインの講義だけではフォローできない実技実務実習については、他の授業に干渉しない５月31日（日）と６月14日（日）、７月５日（日）の３回、関西大学博物館にて希望者を対象に対面で実施した。月に１度程度、年間７回程実施していた近畿圏の博物館・美術館施設の見学実習については、緊急事態宣言が解除され、感染状況が落ち着いていた９月に１回実施できたのみで、それ以外に予定されていた見学実習は中止とした。例年、夏季休暇中に実施している２泊３日で東京近郊の大規模館園を中心に観覧する「東京実習」もやむなく中止となった。そのため、夏休みの課題として、各自３館以上の博物館・美術館を訪れ（ネット上のヴァーチャルミュージアムも可とする）、感想や気づいたことをレポートとして提出することとした。

なお、2020年度の履修生は、１組（金曜日）14名、２組（土曜日）６名の合計20名である。2020年度関西大学博物館実習の春学期のプログラムは以下のとおりである。

博物館実習　2020年度通年授業（前期）
（１組（金曜日）・２組（土曜日）：４時限５時限）
LMSによるインターネット配信授業

４月24日・25日　１週目　ガイダンス　文化財保護法の解説
５月１日・２日　２週目　美術資料の取り扱い
５月８日・９日　３週目　美術・工芸資料の調書の取り方と梱包の仕方
５月15日・16日　４週目　考古資料の取り扱い
５月22日・23日　５週目　考古資料の調書の取り方と梱包の仕方
５月29日・30日　６週目　お茶と文化
５月31日（日）　実技実務実習（１）関西大学博物館実習室・セミナー室・展示室
　１時間目（米田文孝先生ガイダンス・担当者挨拶・博物館展示室見学）
　２時間目（考古資料の取り扱い）
　３時間目（美術資料の取り扱い）
６月５日・６日　７週目　民俗資料の取り扱い・民具調査と採集方法
６月12日・13日　８週目　歴史・文書資料の取り扱い
６月14日（日）　実技実務実習（２）関西大学博物館実習室・セミナー室・展示室

０時間目（米田文孝先生ガイダンス）
１時間目（文書・歴史資料の取り扱い）
２時間目（文書・歴史資料の調書の取り方と梱包の仕方）
３時間目（考古資料の調書の取り方と梱包の仕方）
６月19日・20日　９週目　展示会企画・ポスター作成／図録編集・出版
６月26日・27日　10週目　刀剣の取り扱いの基礎と方法
６月26日・27日　11週目　表具の取り扱いと保存技術
７月３日・４日　12週目　博物館見学実習について（レポート課題あり）
レポート課題：夏季博物館園見学について　提出期限：10月５日
７月５日（日）　実技実務実習（３）関西大学博物館実習室・セミナー室・展示室
１時間目（刀剣の取り扱いの基礎と方法）
２時間目（美術・工芸資料の調書の取り方と梱包の仕方）
３時間目（資料写真撮影の目的と方法）
７月10日・11日　13週目　資料写真撮影の目的と方法　展示パネルの作成
７月17日・18日　14週目　展示開発ワークショップ
７月24日・25日　15週目　博物館実習展指導と展示企画
レポート課題：実習展示企画案の提出　提出期限：９月24日

このように、2020年度春学期は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の観点から「インターネットを活用した遠隔授業」を実施した。それに対して秋学期授業は、感染拡大予防策を講じたうえで、原則として対面授業を実施することとなった。秋学期の博物館実習の授業は、大学の方針のもと、感染予防対策を講じながら、博物館実習展を中心に、当初のシラバスの内容に従い実施した。対面での実習を行う際には、実習生同士の間隔を空け、教室の換気を徹底し、手指の消毒をこまめに行うよう指導した。資料の取扱いの際に使用する道具類も、実習生同士が共有しないよう配慮した。

また、後に詳述するように、本学の博物館実習の最大の特徴ともいえる博物館実習展は、実習生同士の密状態を回避するなど感染拡大予防の観点から、当初の開催期間より大幅に短縮し、１日のみの開催とした。また、一般公開はするものの、例年のような積極的な広報は行わないこととした。

博物館実習　2020年度通年授業（後期）
（１組（金曜日）・２組（土曜日）：４時限５時限）
シラバスに従った対面授業

９月25日・26日　１週目　文化遺産としての建造物
９月27日　博物館等施設見学（竹中道具館・神戸居留地周辺景観観察）
10月２日・３日　２週目　４限：展示計画プレゼンテーション
５限：展示の技術／実習展での資料借用と梱包／印刷物等の提出方法について

10月９日・10日	３週目	博物館の普及広報と情報化、インタープリテーション
10月16日・17日	４週目	展示指導及び実習展準備作業（学生による自主作業）
10月23日・24日	５週目	展示指導及び実習展準備作業（学生による自主作業）
10月30日・31日	６週目	学生による自主作業
11月６日・７日	７週目	展示指導及び実習展準備作業（学生による自主作業）
11月８日	８週目	博物館実習展（11/8～13開催、11/13日講評、11/13・11/14撤去の予定だったが、11/8のみの実施へ変更）
11月20日・21日	10週目	資料の借用と運送の現状
11月27日・28日	11週目	自然史資料の保存と整理
12月４日・５日	12週目	展示評価（実習展の振り返り）
12月11日・12日	13週目	拓本の取り方
12月18日・19日	14週目	４限：博物館における資料研究 ５限：ユニバーサル・ミュージアムとしての展示
12月25日・26日	15週目	１年間の反省・学芸員の課題
１月14日		博物館実習簿及びレポートの提出締め切り

上記のようなプログラムで、感染予防対策を講じながら後期の実習は対面で実施した。この中で、本学の博物館実習の最大の特徴ともいえる「博物館実習展」は、従来のグループワークから個人展示に切り替えざるを得ず、さらに期間も１週間から１日のみと短縮しての開催となった。次章では、2020年度の博物館実習展の実施について、その概要を記しておく。

４．コロナ禍の中での博物館実習展（2020年度）

関西大学の博物館実習は、本学の博物館学課程の中でも中心となるものであるが、その博物館実習の中でも実習生が取り組む「実習展」を軸として年間の実習プログラムを組み立てており、まさに博物館実習の集大成ともいえる行事である。2020年度の実習展も、他のプログラム同様に新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、これまでとは異なる内容で実施した。

例年の実習展は11月中に１週間の展示期間を設定して行っている。先にみたように、春学期には実習展に向けた諸資料の取扱いや学外見学などの実習を積み上げる。７月から夏季休業中の東京実習を挟み、それから９月にかけて展示計画を作成し、10月から11月にかけて展示作業を行う。展示期間中は学内外に公開して来館者への解説に当たることとなっている。実習展の前後には展示計画プレゼンテーションやインタープリテーション、展示講評、展示評価などの授業を設定しており、自分たちの展示に対しての様々な視点からの反応・評価を得られるプログラムとなっている。

この実習展は、例年、実習生10人前後を１班として全体で３～４班に分かれて行う。班ごとに自分たちで展示テーマを設定し、班のメンバーが共同作業を行って展示を完成する。

2020年度の実習展では、感染症拡大防止に向けた全学的な方針のもと、展示作業において実習生が密集することを避けるため、次のようなプログラムに切り替えた。（１）班分けによるグループ作業は行わない。（２）実習生１人が１つの「ミニ展示」を行う。（３）実習展の展観

は１日間とし、学内外に公開するが、来館者の密集を避けるため広範な広報は行わない。（４）ミニ展示は、原則として、実習生自身が用意する資料・作品１点に博物館が貸し出す資料・作品１点を加えた２点で構成し、外部の館園からの借用は行わない。（５）展示に係る借用事務、調書作成、借用・搬出入作業、展示作業など各実習は、実施時間帯を事前に予約したうえで、担当講師及び博物館学芸員が実習生ごとに個別指導する。（６）例年課題として提出させている図録の作成は行わず、チラシ表面（ポスター）を作成・提出させる。

展示は、関西大学博物館の特別展示室に設置してある幅2600mmの展示ケースを２分割して、１台の展示ケース当たり２つのミニ展示とし、全部で20のミニ展示を完成させた。ミニ展示のテーマは以下のとおりである。

2020年度関西大学博物館実習展展示テーマ

1　江戸時代の貨幣　～秤量貨幣と計数貨幣　中国とのかかわり～
2　秤のれきし
3　音のないオルゴール展
4　関西大学の記念品を見る
5　持ち運ぶ音楽について
6　黄檗～今昔を知る～
7　祈り
8　人々にとっての鏡～江戸時代と現代～
9　日常中のフジタ～時代を超えて～
10　鳥海青児と関西大学
11　読・観～漢字を観てみよう
12　関西大学の節目と歩み～記念葉書からみる歴史～
13　戦前の女性の装い
14　波佐見焼－大衆のための焼き物－
15　暮らしのぬくもり
16　大阪市の地震・津波
17　生命を得た看板展
18　筆記用具の中の動物展
19　日本の猿の郷土玩具－こめられた願い－
20　うつわの美－江戸時代に成立した陶磁器－

実習展実施前には、ミニ展示で「博物館実習としての実習展の場」が成り立つのか、実習の個別指導が円滑に行えるのか、さらに「ミニ展示」そのものが成立するのか、といった危惧があった。また、本来はグループワークで行い、チラシやポスター、広報、アンケート、会計など様々な担当を割り振って行っていたものを、全て一人で行うため負担が多過ぎないかとの懸念があった。そのため、例年実施していた展示期間中のアンケートや予算の計画・執行を経験してもらうために各グループに与えていた補助金の交付は行わないことにして、一人展示の負

担を極力減らした。

展観後の展示講評では、「各ミニ展示は、資料・作品２点の展示という困難を乗り越えて展示としてうまく構成されている」、「隣接する展示との調和を互いに考慮して、１つの展示ケース内で２つのミニ展示が違和感なく構成されているものが多い」、「グループ作業では望めない、全実習生がすべての工程を担当する、という実習効果があった」、「展示作業中に実習生が互いの展示を批評しあう姿が散見された」、「企画から完成・撤収までの各工程を班員によるディスカションを経て実行する協働プロセスがなかったのは残念」、「展観期間が短いうえ、多くの観覧者でにぎわう実習展とすることができなかったため、全体として淡々とした実習となった」などの意見があった。実習生からも、「全ての作業を一人で行わなければならず大変だった」、「展示資料を自分で調達するのに苦労した」など当初から懸念していた感想が聞かれた反面、「全て一人で責任をもって準備できたのがよかった」、「主体的に取り組むことができ、学芸員の仕事の大変さを感じることができた」などの好意的な意見もみられた。

第１図　2020年度関西大学博物館実習展チラシ

このように、2020年度の博物館実習展は例年と大きく異なるプログラムで実施した。これが

写真１　2020年度関西大学博物館実習展の実習生展示
（左右２台の展示ケース内にそれぞれ２人ずつ展示。写真には合計４つの展示が入る。）

写真２　博物館実習展準備の様子

写真３　博物館実習展講評の様子

実施できたのも、当年度の実習生が金曜日・土曜日を合わせても20名しかおらず、展示ケースをうまく割り当てることができ、履修者が少ないことで博物館実習の授業時間以外でも個別対応・指導が可能であったためといえる。今後、同じコロナ禍の中での博物館実習であっても、履修生の数や感染拡大の度合い、授業の開講に対する大学の方針が異なるものであれば、状況は大きく変わってくるものと考えられる。実習内容の質を担保しながらも、その時々にあった臨機応変で柔軟な対応が求められているといえる。

５．2021年度の博物館実習と実習展

2020年度に引き続き、2021年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響により、本学の博物館実習は春学期第１週目のガイダンスこそ対面で実施できたものの、第２週目が休講となり、それ以後も前年度同様の関大LMSを用いた遠隔授業となった。年度当初に実施している文化財保護法の解説や各資料の取扱い・調書の取り方の授業はレジュメや動画をオンデマンドで配信することとなった。

2021年度は、緊急事態宣言の期間中であっても、大阪府から大学への要請とそれに対する大学の方針に従い、可能な限り対面授業で実習を実施できるよう調整した。５・６月の学外の館園への見学実習は中止としたが、６月に入ると希望者を募り、対面での実技実務実習を行うと共に関大LMSでのオンライン配信を併行して実施した。この対面での実技実務実習は、希望者のみで実施したが、実習生の大部分が受講を希望することとなった。実習生たちがいかに対

面での博物館実習を望んでいたかが感じられた。さらに、大阪府下に発出されていた緊急事態宣言が解除されたことを受け、６月21日以降は対面授業を再開した。

このように、春学期の授業は６月以降、対面と関大LMSでのオンデマンド授業を併用しながら進め、７月に入ると対面での実習に加え、学外への見学実習も実施した。しかし、夏季休業中に予定していた北陸をはじめとする学外の見学実習は、感染拡大状況を考慮してやむなく中止とした。

秋学期については、大学の方針により10月11日までは再び原則遠隔授業となり、博物館実習についても最初の２週間は関大LMSによるオンデマンドの資料掲出と動画配信を行なった。博物館実習展の展示企画プレゼンテーションの授業については、Zoomを用いたリアルタイムでの授業を行った。

第２図　2021年度関西大学博物館実習展チラシ

2021年度の博物館実習は、前年度と異なり、通常のグループワークでの実施を決めた。しかし、前年度同様、次のような方針の転換が必要であった。（１）資料の写真撮影をはじめ、作業を行う際には博物館事務室への事前連絡を義務付け、複数のグループが同じ時間に集まらないようにする。（２）展示資料は原則としてグループメンバーが調達できる身近にある資料とし、学外での借用は控える。（３）例年提出課題としている大部の図録ではなくA4判４ページの展示パンフレットを印刷物作成の課題とする。（４）展示期間は11月８日から11月13日までとし、12日と13日にそれぞれ金曜日班と土曜日班の展示の講評を行う。（５）展示期間中は実習生による来館者への解説は行わず、代わりに解説動画を作成し、２次元コードを用いてそれにアクセスできるようにする。

写真４　2021年度関西大学博物館実習展の実習生展示
（左右２台の展示ケースで１グループ分の展示とした。）

このように、2020年度の１人展示から2021年度は通常の

グループワークに戻すことができたものの、従来の実習展に比べると多くの制約を設けることとなった。基本的に展示資料は身の回りで調達できる資料としたため、展示テーマに広がりを持たせることが難しくなったようである。また、展示期間中に展示室に常駐し、来館者に対して解説を行うことをしなかったため、来館者の生の声や感想を聞くことができなかった。さらに、博物館実習の担当教員による講評も、例年は金曜班・土曜班の合同で行っていたが、教員・学生共に密をさけるため2021年度はそれぞれ別日に講評を行った。そのため、別曜日班の展示についての講評を直接聞くことができず、後日紙面にまとめたものを目にするだけとなった。講師陣の生の声を聴き自分たちの展示とも照らし合わせて今後の糧とする時間だっただけに残念である。今後、コロナ禍の完全な終息が見込めない現状では、同様の状況下で博物館実習を運営していかざるを得ない可能性が高い。その中で、2020年度・2021年度の２カ年にわたり経験したことを活かし、教員・学生の感染防止を念頭に置きながらも、学生の学びと経験の場を担保できるような対応が必要であると考える。

おわりに

本稿では、関西大学における博物館学課程の概要を紹介し、課程の中核を成すといえる博物館実習について、コロナ禍の中での実施状況を一つの事例として報告した。各大学・各館園によって担当教員数や受講者数、館務実習の実施方法等が異なり、コロナ禍の中での対応については千差万別であるといってよいだろう。また、所在する地域での新型コロナウイルスの感染状況によっても対応の仕方には大きな差がでてくると思われる。

そのような中で、本学の博物館実習の実施状況に関する報告は単なる一事例に過ぎないかもしれない。しかし、この２年のコロナ禍の中で、それぞれの立場で見えてきた課題については共通する点も少なくないだろう。置かれた状況によって柔軟に対応していくことが必要であろうが、多くの制約のある中で、これまでの博物館実習の質を今後もどうやって担保していくかが大きな課題といえる。学芸員が「モノ」を扱う以上、その取扱いについては実際に資料に触れて経験を積んでいく必要があると考える。これは、コロナ禍の中での「非接触」の方針とは相反するものであり、だからこそ資料の取扱いを学ぶ博物館実習では、その機会をどうやって確保していくかが、どの大学もが頭を悩ます問題であろう。

コロナ禍の中での博物館実習の運営は、動画配信やリモート会議システムの活用術、博物館運営におけるVR技術の応用などについて考える機会を与えてくれたと同時に、資料を扱う経験の重要性についても改めて気づくきっかけとなった。このような共通の課題や問題点についての解決策を模索するにあたって、各々の立場で経験したことを報告していくことも決して無駄ではないだろう。このように、コロナ禍での経験について各自のもつ情報を共有する機会を作ることで、共通の課題に対する認識を深めることができよう。本稿もその一助となれば幸いである。

参考文献

関西大学博物館　2020「新型コロナウイルス流行下における関西大学博物館と博物館実習の取り組み」『阡陵』No81

関西大学博物館　2021「新型コロナウイルス流行下における関西大学博物館実習と博物館実習展の取り組み」『阡陵』No82
関西大学博物館　2021「2020年度　関西大学博物館実習」『関西大学博物館紀要』第27号
米田文孝　2011「関西大学博物館学課程50年の歩み」『阡陵　関西大学博物館学課程創設50周年記念特集』関西大学博物館